

高等学校 令和5年度（1学年用） 教科 芸術 科目 音楽 I

教科：芸術 科目：音楽 I 単位数：2 単位

対象学年組：第 1 学年 A 組～ H 組

使用教科書：（ ON！ ）

教科 芸術 の目標： 諸芸術の幅広い活動を通して、各科目における味方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

【知識及び技能】 芸術に関する各科目の特質について理解するとともに、意図に基づいて表現するための技能を身につける。

【思考力、判断力、表現力等】 創造的な表現を工夫したり、芸術のよさや美しさを深く味わったりできるようになる。

【学びに向かう力、人間性等】 生涯にわたり芸術を愛好する心情をはぐくむとともに、感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。美術の幅広い創造活動を通して、造形的な見方考え方を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の美術文化と幅広くかかわる資質・能力を育成する。

科目 音楽 I の目標：

【知識及び技能】	【思考力、判断力、表現力等】	【学びに向かう力、人間性等】
五線譜と音符の成り立ちを理解し、音高とリズムを自力で読み解けるようになっていく。読譜とリコーダー奏法を結びつけて演奏できる実践力を意に付けている。	歌唱における歌詞への理解と共感、器楽におけるアーティキュレーションを大切に、どのように演奏するかを意図し、表現しようと努力できるようにしている。	楽曲の時代背景や作曲家の境遇を理解し、音楽を深く学ぼうとする意欲を培っている。合唱練習を通して協働して音楽を作り上げる喜びを感じている。

単元の具体的な指導目標	指導項目・内容	表現			評価規準	知	思	態	配 当 時 数	
		歌	器	創						
前期	1 五線譜の構成と音符の種類 各国の音名を知り、音部記号の意味を理解する。五線上の音名を読み取るようになる。 縦線と小節を知る。 音符の名称とその由来を知る。 音符の長さに対応する休符を知る。	英語イタリア語日本語の音名 五線の名称 ト音記号とヘ音記号の由来と意味 音名読譜 全音符 二分音符 四分音符 八分音符 付点の意味 付点二分音符 付点四分音符 音符に対応する休符	○			五線譜の持つ情報について興味関心をもって理解しようとしている。 ルールに則ってト音譜表第二線の1点ト、ヘ音譜表の第四線カタカナへを基準に音名を解読できる。 音符の種類と音化の関係を理解し、リズム唱への基礎力を培っている。	○	○	○	6
	2 リズム唱 一定のテンポでリズムを唱えられるようになる。 一定のテンポでリズムうちができるようになる。	各音符休符のリズム唱法 4小節の楽譜のリズム唱 机叩きや手拍子、足踏みでリズムを奏でる。リズム遊び。読譜の総復習の筆記テスト。	○			拍は一定のテンポで流れることを理解し、テンポをキープしながらリズムを唱えたり奏でられる。	○	○	○	7
	3 アルトリコーダー① タンギングができるようになる。 運指を覚える。低音から高音まで吹けるようになる。	タンギングを理解する。 左手の指使い、特にソ、ファ、ミの使い分け。 高音、低音の出し方のコツ。 リコーダーのリズム唱。童謡の探り吹き。タンギングの個別テスト。	○			ソ、ファ、ミの運指を混同せずに演奏できる。 タンギングの擬音「ティー」でリズム唱ができる。「ちょうちょ」「ぶんぶんぶん」「大きな栗の木の下で」などの童謡を、楽譜を見ずに吹ける。	○	○	○	8
	4 アルトリコーダー② 自力で単純なリズムの楽譜を読み、リコーダーを演奏できるようになる。	五線1段の簡単なリズムの楽譜を難易度に6曲ものにする。	○			上記の基本的な演奏技能を使いこなして、教わらずに練習できる。	○	○	○	4
	5 アルトリコーダー③ 自分の演奏技量の程度を知り、自分のレベルに合った曲を選べる。	難易度順の1段の曲4曲を自力で練習し、自分の技量を見極める。その上で、自分のレベルに合った曲を選ぶ。	○			自分の演奏技量はどの程度か決定できる。 自分の演奏レベルにあった曲を間違いなく選ぶことができる。	○	○	○	5
	6 歌唱①合唱に適した発声法ができるようになる（授業で毎回行う）。	準備運動、姿勢、複式呼吸法、発声練習	○			発声に関わる身体感覚を意識し、調整し、合唱にふさわしい発声に近づけるよう意識している。	○	○	○	歌唱 授業 時数
	6 歌唱②二部合唱「翼をください」 二部合唱ができるようになる。	同上 男声女声混合の二部、異声二部の合唱になれる。	○			主旋律と副旋律の対比と和声感覚を味わいながら歌っている。	○	○	○	5
7 歌唱③混声四部合唱「ふるさと」 混声四部合唱の楽しさ奥深さを知る。	歌詞の背景を考える。パート練習。同声合唱、高低合唱、内外声合唱、合唱練習を通して自主練習の力を培い、美しい合唱で歌えるようになる。パート二人の合唱でコンサート形式の実技テスト。	○			書く練習の目的を意識しながら、美しい合唱を実現しようとしている。	○	○	○	10	





